

自序

私は一九一〇年三月二二日、香川県の西端に位し、静かな内海に面する豊浜町で生まれました。だから今年私の還暦に当たります。省みてにわかには老いこんだようにも思わないが、それかといて体力の限界を無視することができる年とも思われません。白樂天の詩にあるように、「非老亦非少」というところです。

それにしても還暦を迎えたのだから、この機会に日頃お世話になっておる方々を招いて。パーテイでもやつてはという勧めもありました。ところが私にとっては平々凡々馬齢を重ねて還暦を迎えたに過ぎないので、進んでそのことを人に披露する程の勇氣はありません。それかといってこのまま何もしないで見送るのも、これまで私に恵投して下さった先輩友人の好意に対し、甚だ申し訳ない気がいたします。

そこで、色々考えた揚句、この二、三年の間に、私が新聞・雑誌等の求めに応じて書いた拙文

や、各地で行なつた講演の要旨などの中から棄てがたいものを掘り出し、それに若干の新編を加えて一つの本にし、先輩や友人に還曆を迎えたいしに差し上げてはと思いつき、取急いでまとめてみたのがこの小著であります。

われわれの時代は、空前の変革期だといわれております。確かにこれまで人と人、国と国との間柄を結合してきた古い絆はその力を失いつつあり、一方それを阻んできた古い障壁のうちのあるものは取除かれようとしております。ところが新しい結合をもたらす紐帯は未だ発見できないのに、新しい分離をもたらす数々の障壁が生まれようとしております。そういう変革の地点に立つてどう対応するかがわれわれの課題であり、全稿を通しての私の課題でもあつたのであります。しかし私の力量の不足からそれは未だ全く手探りの域を出ないものであります。

しかもいよいよ取りまとめにかかつてみると、旧稿の隨所に取材や表現の上で不備な箇所が出てくる始末でした。そうした点については、文意をそこなわない程度でこの際補正することといえました。それにしても、思想は至つて生硬未熟であり、取材は極めて限られており、表現もまた稚拙なものであります。いわば散人のものでした雑俎の類いに過ぎません。ただこの小著は、還曆を迎えてこれから新しい自誨の旅に立つとする私のささやかな苦吟の記録であります。お開な折に拾い読みを願ひ、一層の御高示を賜わるよすがにもなれば望外の倖せであります。

私はこの小著を、学生時代より今日に至るまで、終始愛顧と激励を与えて下さった加藤藤太郎翁御夫婦に捧げることができるとを光栄に存じております。加藤翁が、旧王子製紙から神崎製紙に至る永い実業界の御生活を通して、後進に寄せられた慈父のような深い愛情に痛く敬服しておりますが、先年第一線を退かれるに当たり、貴い私財を傾けて、加藤奨学財団を設立され、多くの有為な青年を愛育されておることに、尽きない感激を覚えております。

この小著の出版に当たり、私は日頃敬慕する鹿島守之助先生をはじめ、私自身も関係させて頂いておる許りでなく、この小著の出版を奉仕的にお引受け下さった鹿島研究所出版会の倭島英一、佐藤弘一、橋義雄三氏の渝らない好意と友情に対し深厚な謝意を表します。また取材や原稿の取りまとめに協力してくれた通産省の大谷直弘、福川伸次の両君と、私の秘書団、特に真鍋賢一、山田輝男、小国宏、鈴木玄雄、石野宏造の諸君の労を心から多としております。ここに謹んで感謝の意を表明いたします。

昭和四十五年五月吉日

東京都世田谷区玉川瀬田町

八七三ノ二の自宅にて

大 平 正 芳